

声を聞くもの

——唱導と大衆僉議——

一 はじめに

声の課題というと、もっぱら声を発する側からとらえられがちであるが、逆に声を聞く側の問題群もあることに留意したい。声をめぐる発信・受信双方向からの問題設定が必要になるだろう。

このことはすでに「説話の声」(新曜社・二〇〇〇年)の終章でふれたが、もうすこし具体的におしひろげてみておきたい。

古来、「聞き耳」ということばがあり、聞く行為が格別に重んじられていた。「聴耳草紙」なる本があるほどだ。へきくゝ行為は、たんに声を聞く行為にとどまらず、訊く、利く、効く、といった行為や動きのすべてを含み込む、ひろい概念であったはずだ。「聞き酒」などに典型化されるであろう。「きく」は決して音を受信する受け身の行為ではなく、逆に積極的に質問し、問いただす能動的な行為でもあり、ききめをもたらず意義ももっていた。今、聞く行為を受け身といったが、それ自体すでに近代的な発想であり、耳を澄ますとか、聞き分ける、といった主体的

で能動的な営為としての聞く行為の意義を見落としてはならない。近代は映像の時代といわれるように、視覚にいちじるしく傾斜した時代であり、へきくゝ力を弱らせた時代でもあった。今後さらに視覚にとどまらぬ共感覚のありようが問い直されるであろう。

いずれにしても、声を聞く側に焦点をあてることでおのずとみえてくるのは、声の届く範囲、聞く行為を可能とする時空間、つまりは場の問題である。マイクや拡声器もない前近代において、声を遠くまで届かせる、運ぶ力はどんなものだっただろう。軍記によく出てくる大音声などという声は、どんな質の声で、いったいどこまで響いたのだろうか。そこでは身体そのものが拡声器と化して、周囲に響かせたに相違ない。そういう身体に深く根ざした声のありようを我々はほとんど忘れてしまっているのではないか。

声を発する側とあわせつつ、声を聴く側にもたつて、その場の問題を考えてみたい。ここではさしあたって、中世に最も高揚

し、さまざまな媒介の場となつた講会の唱導や寺社の境内で行われた大衆衆議の場を中心に見ていこう。

二 唱導の場

安居院流の唱導を大成した、名高い澄憲をめぐる興味深い逸話が「源平盛衰記」巻三にみえる。すでにとりあげたことがあるが、この問題でも恰好の例といえる。承安四年（一一七四）、澄憲が最勝講の表白でみごと雨をふらせる、祈雨表白として長く喧伝される話である。澄憲の名を一躍高からしめたものだが、一人清盛だけが「雨が降りそうな時期にあわせただけのことだ」と冷ややかに反応する。そのいわれが延々と語られる段である。ことの起こりは、澄憲を登庸したはずの後白河院がその説法のすばらしさに舌をまき、尼の生んだ子かとあざ笑う。すると大藏卿泰経が、叡山のある児が琵琶湖で入水した供養の導師を澄憲が勤め、施主段の秀句で評判を集めた逸話を紹介する。その秀句とは、童子ノ年ハ十八歳、髪ハ長ク御座ケレ共、命ハ短カリケリ。今ハ髪、力及バズ。仏助ケ給ヘ。

三百人ノ其内ニ、女御百人販婦、公卿百人伊勢平氏、験者百

人皆乱行、三百人。

とつけあわせ、扇をひろげ、殿上をささとあおぎ散らして、

皆人ハ母ガ腹ヨリ生ルルニ、澄憲ノミゾアマクダリケル。

とうたつて、走り入つたという。その場にいた重盛は父清盛が評判悪いために澄憲にきりかえされたので、帰つて父をいさめると衆目の前で宣言し、周囲は院のいたずらがすぎると非難。重盛が戻ると、はたして清盛は怒り心頭に発しており、重盛は「澄憲の猿楽ごとにはすぎない、ただし今度このようなことがあつたら私も黙つてはいません」と何とかなだめすかす。この一件が、清盛が澄憲の手柄を喜ばない要因としてあげられるわけである。

澄憲と清盛とは平治の乱以来の因縁があり、澄憲の父信西は命を落とし、澄憲も配流の憂き目を見ていた。平氏の成り上がりや権力中枢への批判が「三百人」以下の澄憲の痛烈な文言に表される。また、澄憲の力量を認めつつも、若僧のくせに「口ノキキタル様」だと澄憲をからかわずにはいられない後白河院の屈折した心情も透けてみえる。時の人物たちのあやが微妙にからまりあつた秀逸の話題になつている。

「盛衰記」の文脈の基本は、重盛と清盛の対比にあるが、澄憲の唱導と即興的な猿楽芸がもうひとつの焦点になつている。唱導や猿楽をとらえる上でもきわめて興味深く、重要なくだりである。ここには、澄憲の唱導や芸が三重にあらわれる。一番の大枠が祈雨表白であり、第二は泰経の語る叡山の児追善をめぐる施主段の秀句、第三は院の挑発による猿楽ごとであり、清盛が澄憲をねたむ例証として展開される。まず第二の児供養における施主段

の秀句は、「髪」から「神」へ変換し、「神」よりも「仏」という観山に即した洒落である。観山の児物をおわせつつ、観山での澄憲デビューともいえる逸話になっている。しかもそれは大蔵卿の語りで披露される、すでに故事化したうわさのレベルにある。第三の猿楽わざが最も興味をひくが、「袋草紙」をはじめ、高座を下りたときの猿楽をめぐる話題はいろいろあり、唱導や法会をかたくるしいものだけみならずのは不当である。もちろん「盛衰記」の物語が実際にあつたかどうかを追究しても無効であろう。史実か虚構かという二元論の陥穽に落ち込むのではなく、そういう物語がそのようにしくまれ、記述されたことの意義がテキストに即して問い直されなくてはならない。

「盛衰記」は著名な澄憲の承安の祈雨表白に端を発してこのように入り組んだ物語を形象化し、清盛・重盛話に組み入れた。澄憲に対して清盛の反応をからめ、賛嘆一辺倒の澄憲の唱導を相対化するまなざしを介在させ、後白河院の対応もあわせた。猿楽芸を盛り込む手口はなかなか巧妙で、そこに他本にない「盛衰記」の特徴がよく出ている。

ここで澄憲の演じた猿楽ことは、

猿楽ト申ハ、オカシキ事ヲ云ツツケテ、人ヲ咲ハカシ侍ルゾ
カシ。君ノオカシキ事ライハセントテ、「尼ガ子」トハヤサ
セ給ヘバ、澄憲猿楽ゴトヲ申ニテ侍ベシ。

と重盛が総括する通りであろう。唱導と猿楽はどう結びあうのか。機知に富んだ言辞や所作が唱導の場でしばしば行われたことは、たとえば「宇治拾遺物語」をはじめとする仲胤の例などから

あきらかでも、おそらく澄憲も例外ではない。それにしても、この「あまくだり」のはやしたてに對する澄憲の対応はあまりにできすぎている感が否めない。先稿で指摘したように、「法華経直談抄」をはじめ、中世後期にみる澄憲の猿楽芸へのイメージ形象のなせるわざとみるほかない。扇をさつとちらして「澄憲のみぞあまくだりける」といつて走り入る所作は、寸分のすきもない猿楽芸の絶妙のきわみをみせてあまりある。歌舞伎の大見得を切る所作にも通じるような芸であり、芸人澄憲の誕生を宣言するものとなっている。たとえば、「宇治拾遺物語」などにもよくみえる、猿楽ごとを演じて笑いの渦をまきおこして遁走する、へ笑いと逃走の鑄型そのものといつてよい。

また、ここで問題にされる尼の生んだ子とは、安居院が例外的に妻帯を許されたことをさし、それだけ門流の維持が至上命令だったことを意味する。平治の乱で流され、辛酸をなめた信西一門と栄華の絶頂をきわめた平氏一門との対比がきわだち、尼から生まれた安居院流一門への羨望や差別の視線も同時にここには介在している。安居院の妻帯には当然他からの反発があり、「元亨釈書」や「摺拾集」にみえ、「古今著聞集」では澄憲の子聖覚が「おやまきの聖覚、ははまきの聖覚」とはやされる例がみえる。澄憲はそれを逆手にとつて、「尼下り」を「天降り」に転換させた。天孫降臨をはじめ中世神話につらなる神話の復権もどこかにおわせる、巧妙な芸の域を思わせる。それは、観山の児供養における「神」||「髪」とも類似し、「宇治拾遺物語」第八〇話にみる仲胤が「諸仏、亦然」を「諸神、亦然」に変換する例などとも共

通していよう。

すでに紹介される、説経や説経師のあり方の基本を説いた醍醐寺藏「転法輪秘伝」^三には、面倒みている小院が説経師になれるかどうかという客人の問いに対し、房主は説経師の条件に以下のよういいう、

先、声ハ能ク御坐ス歟。見目ハ何カニ。人愛有テ、サシムカウタル体、モノモノシウ、ナヅマシゲナク、ツキヅキシウハ御坐スヤ。物打イフ詞ツヅキ、自然ニタクマシキ体ニ御坐ス耶。カリソメ物語ナムド打スルモ、口ヲカシキ氣、御坐ス耶。サテモタビタル事ナムドヤ御坐ラム。衆憶ヤセサセ給フ。又、アマリニ、クスシキ様ニ強学生心ニテ、愛モナク、詞ハツカヒナムトヤシタマフラム。

説経師たる要件の第一に声がいいかどうか、容貌がいいかどうかをあげる。これは「枕草子」の有名な「説経師の顔よき」などとも似かよう。人と相対しても、どっしりして、言いよどむことなく、場になつてゐるか、語りの調子がおのずとしっかりしているか、普通に話をする時でもことばたくみであるか、あまりに神妙に学問一心で、そつけない話し方はしていないか云々と、おのずとそなわつた語り口のありようが事細かに指摘される。説経師のあるべき規範が示され、まさしくその焦点に声があつた。これは唱導の肝要が「声・弁・才・博」にあるという中国以来の理念（高僧伝）他にも応じており、日本の唱導界にも実状に即して要請されていたことがうかがえる。

おそらく澄憲はこうした規範に最もかなつた逸材であり、安居院流の権威化をおおしく推進させたが、これにさらに猿楽芸が付

随してくる、というのが右の「盛衰記」に代表される中世後期の解釈である。先にふれたように、唱導と猿楽は無縁ではありえないが、澄憲その人が猿楽芸に直接関与していたかどうか、やや疑問である。安居院の唱導は院をはじめ、中枢の権力の護持に寄与すべく遂行されるから、より高邁な教学に根ざしたものであり、通俗的な面にはたやすく乗りがたかつたと思われる。「盛衰記」をもつて澄憲の実像に収斂させるのはやはり躊躇される。「盛衰記」の澄憲像には、あくまで猿楽芸への期待の地平が凝縮されているのであつて、それ以上ではないであらう。中世後期以降の安居院の消息は不明であり、すでに実質的には断絶しているとおほしく、それ故過去の権威として規範化され、「烏亡問答抄」のごとく東国をはじめ各地にその余波が波及していた。「神道集」が「安居院作」をかたるのもその典型であり、そうした動向に応じて、猿楽とも結びついた芸能への路線が幻想化され、次第に肥大化していったと想像される。その意味においても、「盛衰記」の物語は実によくできてゐる、といつてよい。

そしてここでさらに注意すべきは、後白河院の存在である。周囲を挑発し、はやしたてさせる仕掛け人は当の後白河院であり、澄憲のすぐれた唱導を認めつつも、名状しがたい違和感をおぼえていた、という形象のしかたがなされてゐる。これも事実かどうかはたしかめようがない。澄憲を登庸し、逆修をはじめ積極的にみずからの唱導を担わせたのはほかならぬ後白河院その人であつた。「転法輪抄」にはすくなく「後白河院帖」が伝存する。院の挑発に乗つた澄憲の猿楽芸も、究極は後白河院に収束するわけ、澄憲はほとんど院におもねる道化を瞬時演じてみせたわけ

である。「三百人」以下の文言も結局は後白河院に向けられる。批判や諷刺を込めうるからこそ道化なのである。あらかじめ二人

の間で了解され、仕組まれていたかもしれないと思わせるほどだ。究極的に声を聞くものは後白河院にほかならず、唱導も猿楽も権力から逸脱する動きを内在化させつつも、権力に吸引され回収されるものだった。

ここではほとんど検討の余裕がないが、唱導の行われた時空、場を今後さらに立体的にとらえていく必要があるだろう。澄憲の著名な祈雨表白は宮中清涼殿で行われた、恒例の最勝講の第二日夕座であった。猿楽を演じたのは、法住寺殿での御講の導師の折りであったという。後者は年代が特定できないが、「転法輪抄」によれば、澄憲はすでに平治二年（一一六〇）には院の逆修を行っている。「盛衰記」では重盛が当時は新大納言だったとあるから、仁安二年（一一六七）以降のことになる。法住寺殿で澄憲の出仕した法会で関係のありそうなのは、嘉応元年（一一六九）六月の院の逆修であろうか。しかしこの時、澄憲はすでに四十三歳であり、「盛衰記」で院が澄憲のことを「此僧ノ若サニ」といつているのと合わない。

法住寺殿を舞台にしばしば行われたはずの法会はどこで行われたのか。澄憲の唱導や猿楽の声はどのように響き、堂舎の構造とどのように関連しあうのか。そもそも法会の行われる堂は音声をどのように計算して設計されたのだろうか。問題のとは口によりやくたどりついた時点にすぎず、すべて今後の課題とするほかない。

三 大衆僉議の場

法会の唱導とあわせ、もうひとつ中世の寺社できわだつのが大衆僉議の場であろう。これは南都北嶺の寺社勢力の強大化に際じて、大衆とか衆徒とか悪僧と呼ばれる、武装化した僧達、いわゆる僧兵らが輩出し、堂舎の前に集結して合議するものである。法会の唱導と異なり、主に境内で行われ、衆議で事を決し、行動を起す場としてあった。「平家物語」などに具体的に描かれる。

屋内の法会に対する、野外の声を聞く場として注目され、中世の〈声〉をとらえる上でかせない場のひとつといえる。ここでも「盛衰記」を中心に検討してみたい。

これも前稿でとりあげたことがあるが、「盛衰記」巻四にみる、有名な白山騒動の強訴事件を例にしよう。⁽⁵⁾山門の僧兵らが神輿をかついで内裏に迫ったのに対して、源頼政がこれを阻止。使いに立つた渡辺競の語りを通して頼政の言説がカタられる。延慶本をはじめ、読み本系に詳しい。頼政がことばたくみに重盛の陣におもむくよう挑発し、叡山三塔随一のものいい、大悪僧毫運が出ばって、頼政の文武両道にひいでた才を賞賛、「みやま木の」の歌まで披露し、一同「尤々」と納得、重盛軍に御輿を向けたという。この頼政と毫運のやりとりをふまえ、さらに毫運が後白河院のもとに強訴に及んだ時の逸話が語られる。院は「山門に知られる僉議者だから、山門の講堂でやるのと同じように申せ」といい、毫運は得々と説明する。まず独特の発声法を強調し、「三千の衆徒が破れた袈裟で頭を包み、三尺の入堂杖をつき、小石をひとつづつ持つてその石に腰掛け、同宿にも知られぬようにし、鼻

をおさえて声を変え、僉議に賛成の時は「尤々」、反対の時は「無謂」という。院の命令とはいえず、ひた頭では僉議はできない」というや、院はおもしろがって「やってみる」というので、毫運は同宿や童部に頭を包ませ、三十人余りをひきつれ、雨落ち石に腰掛け、訴訟のさまを演説し、一同「尤々」でしめくくる。院は大喜びで、訴えを即座に聞き入れたという。

「盛衰記」では、僉議の時の音声が、

歌詠ズル音ニモアラズ、經論ヲ説音ニモ非ズ、又指向ヒ言談スル体ヲモハナレタリ。

という。この説明は「盛衰記」にしかみえない。和歌をよむ声でもなく、經論を説く声でもなく、差し向かいの言談の体とも異なる、独特の声であることを強調し、さらに「満山ノ大衆立廻ラレヨヤ」と鼻をおさえて声づくりをすることが指摘される。僧兵らの僉議の場と音声の面からきわめて注目される。

顔を隠した声づくりの衆議は、発信者が誰かわからないようにするため、ある意味で民主的な議決手段である。他者を気にせず自分の意見を自由に述べ合い、意思表示を可能にするために編み出された独特の衆議制度といえる。しかし、中心の僉議者をはじめ、おそらくそれが誰かは周囲には暗黙の了解ができており、ほとんど儀礼化もしくは芸能化していたと想像される。それが都でうわさされ、後白河院に知られるほど評判になっていた。いかに異質な場であったかをよく示し、その様式にとどまらず、独特の音声そのものが多くの人々の関心をひきよせていたことがうかがえる。

毫運はひとつの典型であり、後白河院はそれをたくみにひきよ

せて、訴訟を芸能として変換させ、吸引したといえる。訴訟のいかんはほとんど問題にされない。ここでも、すべては後白河院という権力に回収される構造になっていることを見のがせない。声を聞く王者、すなわち王権に収斂する物語の構造にはかならない。

こうした大衆僉議の様子は、絵巻の「天狗草紙」や「法然上人絵伝」などに絵画化されていることも周知の通り。「平家物語」とあわせて読むことができる。たとえば、「天狗草紙」では、延暦寺の巻、園城寺の巻いずれにもみえる。前者では、「三塔会合僉義」として以下のような画中詞がみられる。(以下、引用は「続日本の絵巻」中央公論社版の釈文による)

園城寺廷弱の衆徒等、ややもすれば山門に取り懸けて、雲泥に居して、等日の思ひを成す。立ち渡りて、灰燼となされや。

夫、我山は仏法繁昌の勝地、鎮護国家の靈場也。訴訟他寺他門に異なり、非扱を以て、理訴と為す。聖断滞り有らば、早やかに諸院諸堂を閉門し、七社の神輿を陣頭に降り奉り、天下の騒動を引出さるよや。

この画中詞の前後、大衆たちの間に「尤」の語が二例だけそえられる。画中詞だけでは見えずそれがちな例だが、「平家物語」とあわせるときわめて重要な語であることが再認識させられる。

一方、後者の園城寺巻でも、金堂の前で「三院会合僉義」として描かれ、延暦寺を意識した文言がめだつた。

山門の非修非学の猛悪の凶徒等、山上に登り、我寺を見下ろすの条、下克上の至極、狼藉奇怪の所行也。早やかに大岳を

蹴崩して、湖水にはめられよや。

夫、戒壇は一寺の大訴、三院の本望也。奏聞の後、二百余歳の春秋を送る。今、賢王、聖主の御代に相当し、忝なくも嚴重の綸旨を下さる。然して、山門の非拠の濫妨に依り、官符を召し返さるべきの由、浮雲の説これなり。天子に二言なく、綸言汗の如し。早やかに官符の旨に任せ、三摩耶戒を以て得度し、諸国の沙弥、一天の安寧を祈請すべし。僉義異義待らずば、一同の音を挙げられよや。

とあり、周圍に「尤」の語が六例もみえる。それぞれ結語の「いられよや」という衆徒への呼びかけは、先の「盛衰記」などにも共通し、衆議や決起をうながす決まり文句として力強い響きをもっていたことがしのばれる。ことに園城寺の最後の例などは、「異議がなければ一同の声をあげなされ」というもので、「尤」の声が周圍に共鳴しあうさまを彷彿とさせるものである。僉議の場に響く声の力感を体得できようであろう。

これらは他の東寺巻などにはみえず、天台系の延暦寺・三井寺にだけ記されるが、南都でも同じように行われており、興福寺では大湯屋や金堂前がその舞台となっていたことが知られる。絵巻では、先の「盛衰記」の小石に座る例などと異なり、全員頭を包んではいるが、ほとんど立ったままであり、三井寺の例では回廊の桁に腰掛けている者が三人ほどいる程度である。また、延暦寺巻では、大衆のさらに外側に甲冑に身を固め、長刀を突き立てた僧や烏帽子をつけた武者風の者や稚児までが参加している。童部がいたことは先の「盛衰記」にもみえた。園城寺巻では大衆だけ

が描かれる、という相違もみられる。僉議の時と場によってさまざまであつたらしいことがうかがえる。

いずれも描かれた大衆僉議の場面として貴重である。とりわけ僉議の場のせりふが書き込まれ、それに合意する「尤」の語が記されているのは、僉議の場の焦点がそこにあつたからにはかならない。「天狗草紙」の画中詞はまさしく「平家物語」で語られるごとき大衆僉議の声が、画面に刻み込まれた例として注目されるのである。

一方、「法然上人絵伝」にもこれら大衆僉議の場が描かれ、「天狗草紙」とあわせて貴重であるが、画中詞はみられない。しかし、「法然上人絵伝」では、大講堂の前に大衆たちがびっしりとすき間のないほど集まり、人垣による円陣が組まれている。その円陣の一番内側の者たちは中腰か座っており、陣形の一番外側にはやはり黒装束に身を固めた武者や鉢巻をした僧形の者らも立ったまま加わっている。おのずと身分差が識別できるようになっている。頭をすっぽり包んだ裏頭姿で、ほとんど目しか見えない者も多いが、中には顔を全部出している者もいる。「天狗草紙」にくらべると、きめこまかく精細に描かれているのが特徴的で、僉議の場の緊迫した雰囲気や熱気の盛り上がりがいっそうの迫力をおびて伝わってくる。

さらに注目されるのは、すでに研究があるように、大衆僉議の場は王の舞や延年の芸能発生と不可分にかかわっていたことである。維摩会をはじめ、論義などにしばしば「頭裏之党」とされる見聞衆がおしかけ、寺家側と対峙しあうほど、「蘆行」「狼藉」に及んだことが「中右記」承徳二年（一〇九八）十月十五日条など

に記されている。裏頭の者は「異類異形」とまでいわれた。集会の召集は鐘や貝吹によつたらしい。これら衆徒の結集は蜂起といわれ、僉議とあわせ、延年の芸の次第にそのまま組み込まれていった。蜂起・僉議は衆徒たちの必須の議決手段や示威行為であり、軍事行動にも直結していたわけだが、それが重層に代表される延年につらなり、形態がいかにされていく。先の「盛衰記」の記述は僉議そのものがすでに芸能へおおしく傾斜していたことを示唆している。

また、「盛衰記」の毫運の語りにも見る王の舞との関連も注目される。先に引用した毫運のせりふで、歌や説経や言談などと異なる特殊な声の説明について、

先、王ノ舞ナルニハ、面模ノ下ニテ、鼻ヲニガムル事ニ特也。

という。これは従来、大衆僉議の場で王の舞が演じられたと解釈されてきたが、はたしてどうか。ここは山門の僉議が通常と異なるものとして、その特異な発声法をいう一連の例証に含まれるものであろう。歌を詠ずる声とも、経論を説く声とも、差し向かいの言談とも異なる。王の舞の折りに仮面の下で鼻をしかめる時の状態だといふもので、これはあくまで発声の特異性をいう例にみるべきではないか。そこから「三塔ノ僉議ト申事ハ」と僉議の具体に移っていくわけで、裏頭の状態で鼻をおさえて声を変えて発声するさまを王の舞の仮面下の発声になぞらえたものである。大衆僉議において、その声がいかに独特のものであったかが強調され、それはそのまま裏頭の風体とあわせ、異類異形のイメージにおおわれるのである。

ところで今、「盛衰記」に即して解釈してみたが、延慶本や長門本では、

山門ノ僉議ト申候ハ、殊ナル事ニテ候。先、王ノ舞ヲ舞候ニハ、面模ノ下ニテ鼻ヲシカムル事ノ候ナル定ニ、三塔ノ僉議様ハ、(延慶本)

云々と続く。「盛衰記」にみる独特の発声に関する説明がなく、いきなり王の舞のことが出てくる。「先」とあるから王の舞を演ずるとみなされるが、仮面の下で鼻をしかめる云々の説明が文脈で機能せず浮いてしまっている。「盛衰記」の方がわかりやすい。読み本「平家物語」以外に例はなく、大衆僉議の場で実際に王の舞が演じられていたかどうか、微妙である。

こうした大衆の裏頭とその異様な発声法とは、これもすでに紹介される、「閉籠衆」といわれる集団にも似かような面がある。一四世紀前半、「元徳二年三月日吉社并観山行幸記」なるテキストがあり、永仁から元亨にいたる山門衆徒のなまなましい抗争事件の実録が展開される。正安四年(一三〇二)、大津神人と山門の駕輿丁との抗争から日吉祭礼が中止され、新造の御輿が八王子の神殿にあげられたところ、弥勒なる宮籠もりに八王子が託宣、この御輿は「人の愁」で作られたので自分は乗れないという。しかし、この託宣を無視して祭礼が強行されたため、翌年に八王子、三宮の神殿は焼失、二年後に遊義門院が没する凶事にそのまま結びつけられる。御輿の振り捨てという非常事態もとられるし、一部の衆徒が要求を貫徹するために堂舎を占拠してこもる「閉籠」という闘争手段に及ぶ。今でいうバリケード闘争にはかならない。目だけ開けた覆面に不気味な声作りで、この世のものとも

思えぬ異形の輩だったという。この一団は「閉籠衆」と呼ばれた。この閉籠衆もまた中世の寺社をめぐる群像として注目され、覆面の声作りに焦点があった。これらが大衆僉議の慣習を淵源とすることはまちがいないだろう。

ところで、再び「盛衰記」に戻ると、右の毫運の語りによつて、頼政が難をのがれ、大衆は重盛の陣に押し寄せ、神輿に矢が立ったため、御輿をうち捨てて立ち去る。院の殿上では先例をもとにした公卿僉議がひらかれ、神輿を祇園社に渡すべきことが議論され、澄憲が召還されてその旨が伝えられると、澄憲は叡山と日吉社の歴史を滔々と述べ立て、白昼の移動は問題があることを力説、公卿らは随喜の涙を流し、晩に及んで神輿を祇園社に運んだという。

大衆僉議に対して公卿僉議がつかえられ、先にみた澄憲が日吉社の別当としてまたまた登場し、叡山や日吉社をめぐる故事や縁起を長々と語るところがおもしろい。日吉社の縁起は「盛衰記」にのみみられる。唱導の徒澄憲はまた弁舌の徒でもあった。唱導の大家澄憲と僉議者の悪僧毫運がここでは明らかに声を発する者として対比される。そしてここでも澄憲の弁舌を聞くのは後白河院その人であった。澄憲の語りが院に収斂する、その構造は変わらない。

以上、中世に典型化される法会の唱導と大衆僉議という寺社にまつわる二例から、「源平盛衰記」を中心にあららみてきた。ここでは澄憲に代表される唱導の名手があり、また毫運に象徴される僉議者の大衆がいた。彼らの語り、弁舌や所作はほとんど去

能化しており、ことごとく後白河院という時の権力に回収される、そういう仕組みが物語の結構をささえていたのである。これはひろく説話とよばれるものの構造にもあてはまり、「説話の声」でふれたように、「王の耳」というべき課題が浮かびあがってくる。声を発する者と同時に声を聞く者のありようが問われるゆえんである。「王の耳」はまた院政期に著しい院たちのへ見る⁽⁹⁾こと政治文化の課題にもつらなってくるが、この検討は別稿に譲りたい。

注(1) 小峯和明「唱導——安居院澄憲をめぐる」(『古典文学と仏教』岩波講座日本文学と仏教9・一九九五年)

(2) 小峯「宇治拾遺物語の表現時空」若草書房・一九九九年

(3) 阿部泰郎「唱導——唱導説話考」(『説話の場』説話の講座3 勉誠社・一九九三年)、及び「転法輪秘伝」醍醐寺所蔵の院政期唱導

故実書について(『仏教文学会例会発表資料』一九八九年十一月)

(4) 山岸常人「中世寺院社会と仏堂」塙書房・一九九〇年、国宝と歴史の旅? 「仏堂の空間と儀式」朝日百科日本の国宝別冊・一九九九年

(5) 小峯「物語論のなかの『平家物語』」(『平家物語批評と文化史』汲古書院・一九九八年)

(6) 松尾恒一「延年の芸能史的研究」岩田書院・一九九七年

(7) 橋本裕之「王の舞の民俗学的研究」ひつじ書房・一九九七年、丹生谷哲一「鬼の呪力——「王の舞」にみる」(歴史を読みなおす5)

「大仏と鬼」朝日百科日本の歴史別冊・一九九四年

(8) 山本ひろ子「御輿振り——その中世的表象——」(『GS』4号・一九八六年)

(9) 小峯「文化と時代——(見る)こと政治文化」(『院政期文化論集』1・森話社)